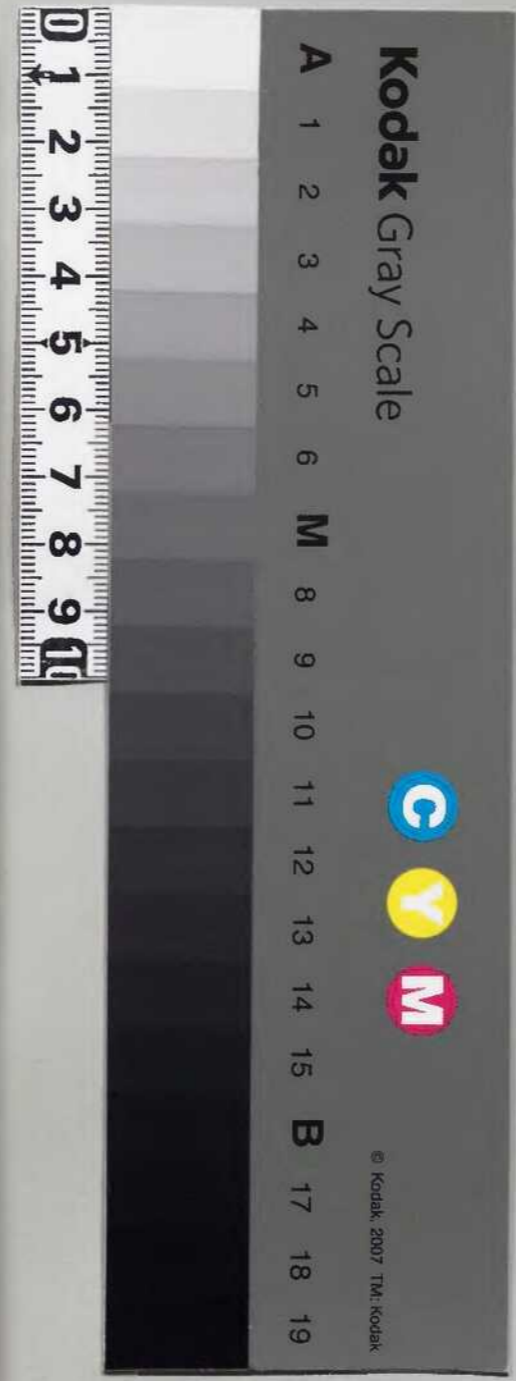


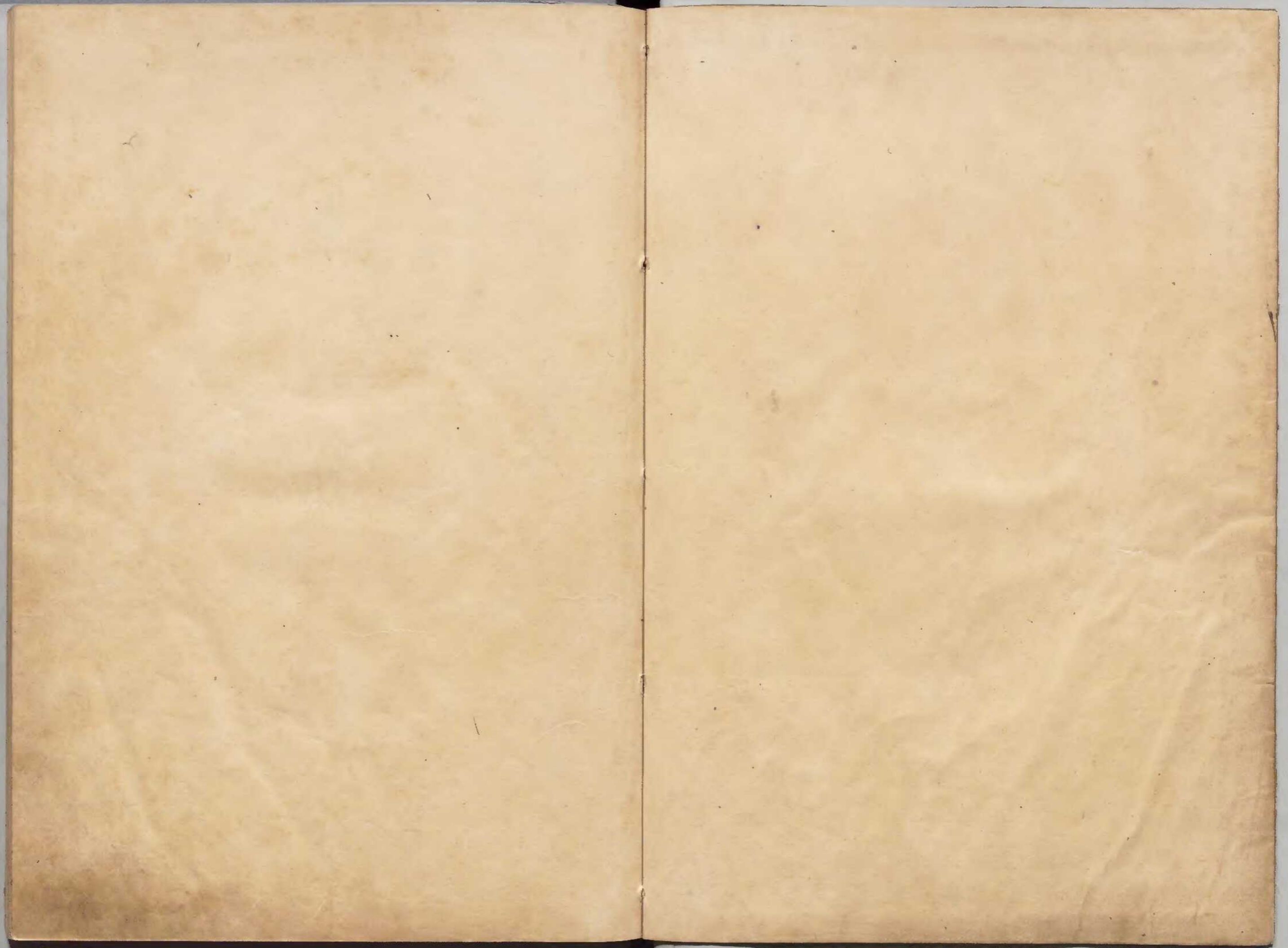
寛永諸家譜

清和源氏辛七冊之内
義光流之内小笠原

47

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(47)	
函號	蜀	76	1





南郷

下山

浅羽

浅原

大井

仁加保

寛永諸家系圖傳

清和源氏

章三

義光流

南郷

● 義光

新島三郎

義清

武田の冠者

世領職

浅草文庫

清光 きよみつ

逸見の冠者 きんみのかむかみ

光 みつ

加々美次郎 かみこのじやう

清光が次男 きよみつがすけなわ

光行 みつゆき

南助三郎 なんすけさん

光光が三男 みつみつがさんご

文治五年七月頼朝卿奉衛と信成の

ふの奥列小後向の^{くさき}に侍を人^{ひと}に撰^{せん}

ま^まく^く年^{ねん}約^{やく}よ^よき^きよ^よ

建久六年二月頼朝卿南助東大寺

侍養のつあ^{つあ}と^と治^ちの^のに^に侍^侍ます

南助^{なんすけ}の^のひ^ひ小^こ石^{いし}清^{せい}水^{すい}金^{かね}指^{さし}の^の侍^侍を

小列^{こりゅう}寸^{すん}

割^{わり}長^{なが}と^と家^かの^の紋^{もん}と^と寸^{すん}

善^{ぜん}提^{たい}可^かと^と雲^{うん}掛^か院^{いん}と^と号^{ごう}寸^{すん}法^{ほふ}石^{いし}照^{しやう}岩^{がん}

暉云

寶光

長次郎

嘉禎四年秋經上洛の時長次郎は

長次郎は

建長四年八月末に親王征夷大将軍

小御せしむるより長次郎は八幡宮に

淨土の事記ししよりなりなり

供ます

同年十二月に軍形定ししより

後節に長次郎は浄土の事記し

長次郎は

善提可と云光信と云寸法石を

素云

時實

又次郎

建長四年四月宗尊親王（親王）御遷居御
御所（御所）此所の御り（御り）と云々
叙（叙）と云々御所（御所）のたぢ（たぢ）は

なり

同年七月宗尊親王（親王）雨（雨）少（少）の（の）宗尊
御所（御所）へ御出（御出）の（の）御所（御所）の御り（御り）
と云々御所（御所）と云々御所（御所）の御り（御り）

小列寸

同年九月宗尊親王（親王）御所（御所）は

政元

仁王（仁王）會（會）と云々御所（御所）の御り（御り）
法名（法名）德雲明（德雲明）

孫次郎 法名（法名）俊嚴（俊嚴）宗（宗）

宗理

表之席

菩提（菩提）可（可）と云々御所（御所）の御り（御り）
法名（法名）道山（道山）示（示）

宗行 しゅうぎょう

真五郎

法名 蓮山 俊公 あき ぶん ぶんこう

祐行 すけぎょう

真次郎

善提下とくと常楽院じょうらくいんと号寸法名 雄山 ゆうざん
海公 うみこう

政連 せいれん

承之郎

法名 善林 明公 ぜんりん めいこう

祐政 すけまさ

真六郎

善提下とくと成光院じやうこういんと号寸法名 寶山 英公 ほうざん へいこう

茂時 もちとき

右馬頭 いせのまこと

正徳二年五月廿一日 平三郎時と申す
ふしと申すは 義貞の御子と
せりしに 自殺す
菩提寺 教浄寺

信長 のぶなが

伊豫守 法石天巖寺云

政行 まさゆき

重宗 しげむね

軍忠と申す少くは 領地相違ある
此の御教書とたす今小是あり
法石浄岳清云

守行 もりゆき

大膳守 禰言法師と申す
直永守 中持氏 逆位退治のと記

さいせん

せん

実お小をせましうて軍忠とぬんんる

いへ沖下文と治ら奥列れ小司職と

うけたゆら沖者書いふふるり

家の幕の役元身割養たりとんご

秋田と南勢とあいたふとさ軍中

よかわくわられ平場まいふらうて

指利とゆい扱人らひーと何々

ためあらのすい病と紋と寸

善提下東禅寺と号寸法名祖山

禪

義政

店司

永享十一年善廣院義教経念れお氏

と退治のいん大子ゆと尾書よら

善廣院より沖感懐とたまらう黒母衣

とゆら

善提下と雲院と号寸法名祖山

東云

政

大胎父

法名芳林傳云

助政

文次郎

善提下サテノ振持院シロヂノ号寸 法名陽山宗云

光政

友之郎

善提下サテノ淨業院シヨウゲノ号寸 法名梁山

棟云

時政

友次郎

善提下サテノ真禅院マゼンノ号寸 法名希山

夾云

通繼 とらふ

次郎 つぐ

善提可ぜんていと法泉院ほっせんいんと号す法名一峯いつぱう
天云てんぐん

信時 のぶとき

右衛門 うゑもん

法名持山ほっぺんぢりやまと号す

信義 のぶよし

嫡男 ちやくなん

俊理しゅんりと号す

早世さうせい法名梅仙うめせんと号す

政康 まさやす

次男 つぎなん 右馬頭 うまのかぶと

兄信義あにのぶよしと号す

と号す

善提可ぜんていと法雲院ほっうんいんと号す

法名

傑山けつざんと号す

守ふ
安信

右馬允

善提可ぜんたいかと金剛院こんごういんと号す

法石悦山ほうせきえつざん

怡云いげん

くろまき
晴政

美之部みづべ

天文八年てんぶん三部さんぶの居城いじやう幸ゆきすす木の時

累かさね代しろお續つづの禮らい文ぶん等とう焼やう寺じのふりもの

月つき下げりりと号す

善提可ぜんたいかと大慈院だいじいんと号す 法石ほうせき耀山ぎやうざん

熙云せいげん

晴継はるつぐ

美之部みづべ

五世ごせい

善提可ぜんたいかと真之院まのいんと号す 法石ほうせき

芳栞ほうせき花はな云げん

たふふ
信

尾門尉 法石 祖若 芳云
は軽の城に居す

信直

大膳 信が嫡子なり
表之御時 継子 母以 法身 たりと云
りれ 家とつぐ
天文十八年 君臣 秀吉 相列 此 小茶と

征討の事 関東より 白の 信直 承福
寸秀 吉より 来 團次 の 脇指 たりと云
衣服 羽織 等と たまはる

目十九年 九劫 源理 亮 政 實 たり
れ かり ありと云 くりと云 ありと云
執 ち 利 家 たりと云 秀吉 たりと云
くれ 九劫 征討 の 事 ありと云 中納言 秀
次と 大将 たりと云 陣と 二本 松 たりと云
先づ け ありと云 飛騨 ありと云 浅野 陣 ありと云

長政城瓦葺り高晴丹作長初少捕直
 政等九初の城とせめらるる信直を
 しむくらくらうと阿守九初はわく
 降ふすうれら族後等ふくく
 謀せらる
 文禄元年秀吉朝鮮と征討の
 とき肥前の石濱をすて信直等
 是々長四年十月辛酉年寸五十四日
 法名江山心云

利直

信直書

文禄四年没五位下叙寸

秀吉長之の秀吉より雲次の子なり

糧料千石とたまはる

同六年思儀一揆蜂起の時

利直みけりてと引かきこき哉

通治元年秀吉の寸五十四日

一三〇

十年寧とらる一々たるいとけり

一ツツ一是トヨリ聖徳の去出陣す

このと記白る一換れ事と口とありすと

いとも利を法わるととたつとく

寛永三年九月二条の城一行業の母

名法院殿の始より法口伝下と叙す

同九年八月十八年寸五十七年

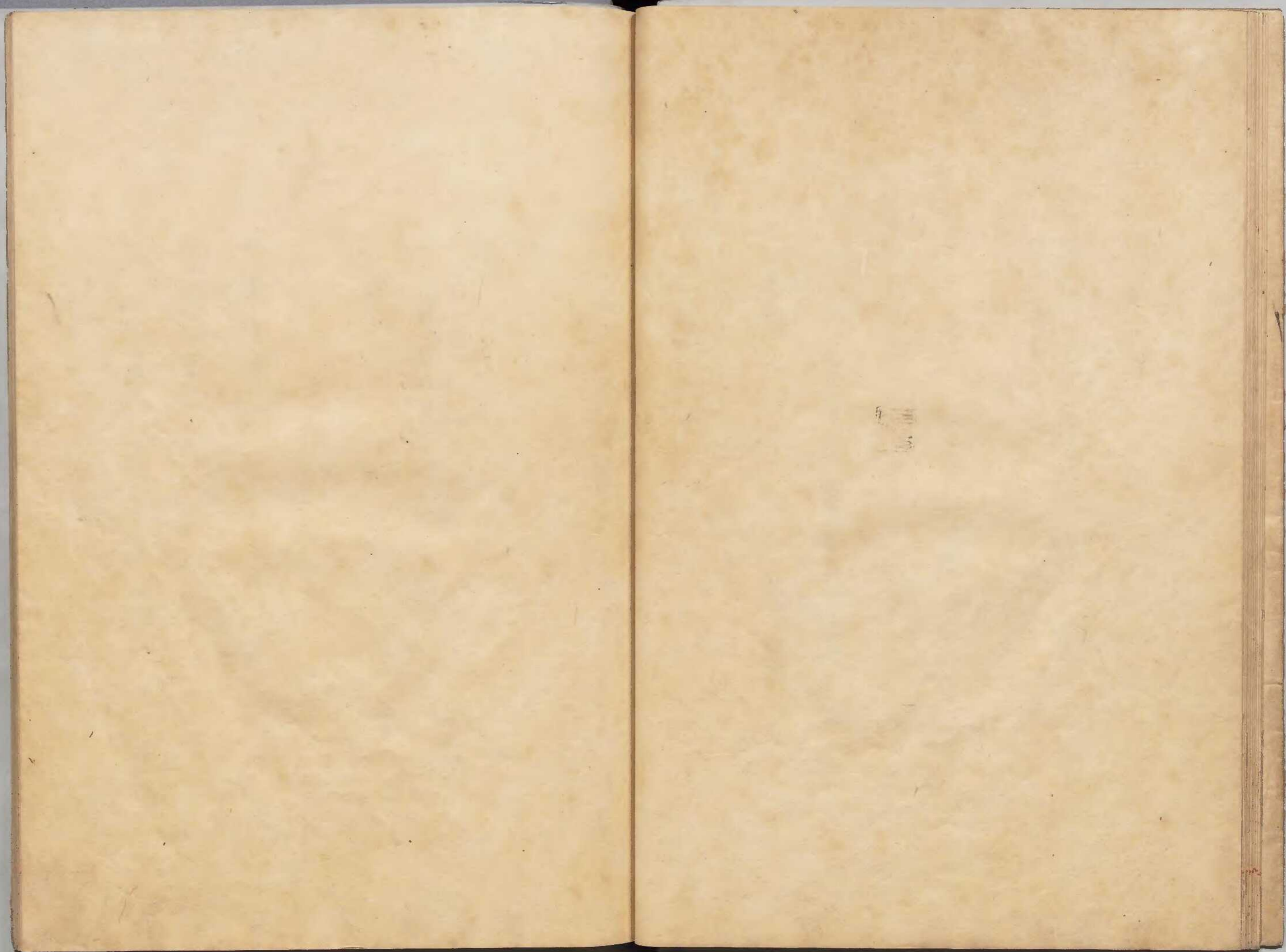
も宗院と号す法石月法清と

重正

山城守

元和四年十二月廿二日法口伝下と叙す

家紋双葉丸



下山

とくだま

先祖甲列に侍

せんぞがらうに侍

● 光次

みつしげ

七師に侍

しちしに侍

生小尾列

織田信長小侍

天正十年七十歳にて病死

法名

長樂

ながらく

正次 まさつぎ

承久御 生玉之列

天正十三年

東照大権現と御一より沖代友と たけな

信行 のり

文長九年六十一年 しん 病死法石

浄蓮 じやう

重次 しげつぎ

平太馬 生玉同前

文長七年

台座院殿と御一より 鈎合 かぎあ と浄

納戸 のり 此役 このえき と浄

信盛 のり

五三册 生玉武蔵

元和八年

朝光

將軍家と稱し、大正天皇と勅す

皇太子

東照大権現と稱し、大正天皇

皇德院殿小治と稱す

光道

皇太子

皇太子

寛永九年

將軍家と稱す

同十五年二十一年と稱す

法名

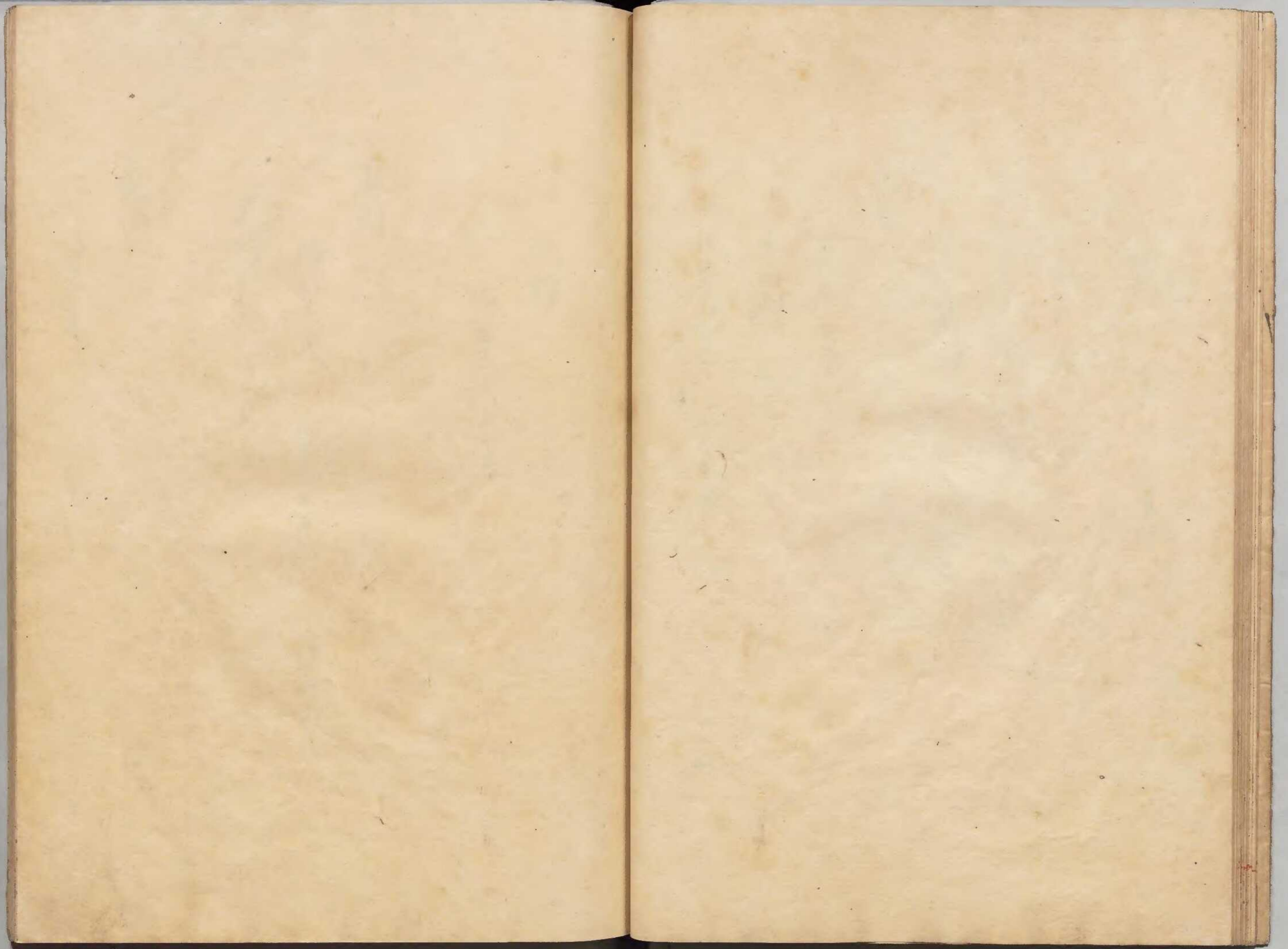
雲院

直次

皇太子

皇太子

家紋釘貫之蓋書



浅羽 あさ

小笠原北条流 せうげん

● 貞則 まこと

治部左卫门

生田重列

法石南公 しんこう

大権現八幡公

貞助 まこと

治左卫门

大持現と心しん一い身しん

身み長ちやう之の年ねん相さう列りやう兼けん原げん下げかかわわくく病びやう

死し法ぽう石せき光くわう順じゆん

身み次じ

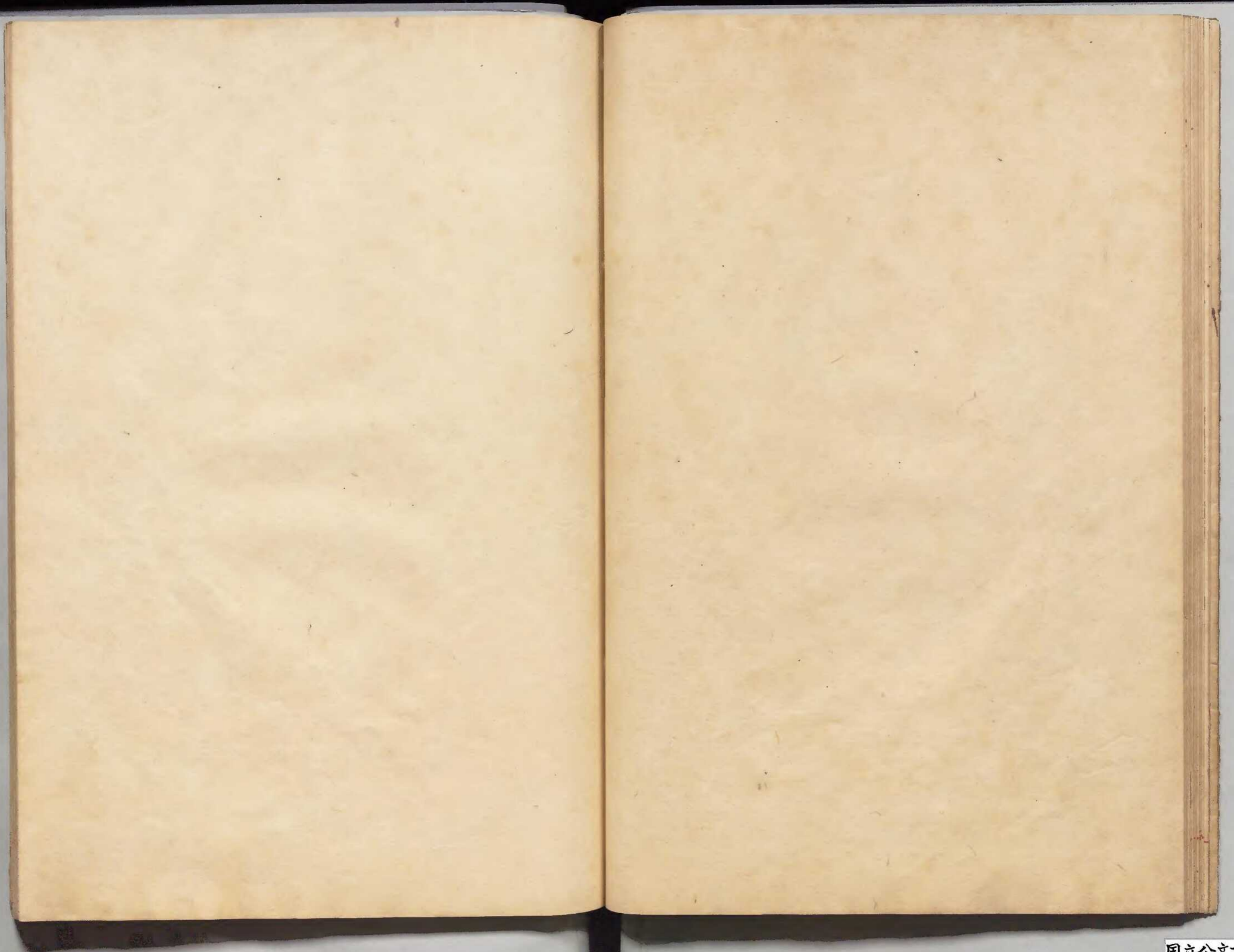
治ち去きょ更せい

大持現

龜かめ院いん殿でん

將軍しやうぐん家け八はち人にん之の身み

家け紋もん新しん



清和 あきむ

● 系 けい

七代后醍醐天皇 皇太子

大権現より法久

系次 けいじ

次郎右衛門 皇太子 法石宗竹

大権現より法久

章正

孫之師

生武彦

十三歳よりて

名徳院殿とぬりしり

將軍家よりりくはしり

家紋

浅原

二系

田原右馬

生玉後列

幸列後河津入玉の付石出されく

東照大権現小はくまら申使と好祝寸

病死年八十八 法石明林常圓

系

清房

生玉回

天正十八年小田原陣の時

大塚現小まごひをり

泊命よりして

お列の白津休友とつけたまりのこと

後後列山あ津休友とけり父をてんを

つざ四十二歳とく病死 法石道房

宗吉

正徳

又三郎

生玉回

大塚現とねしもり大塚津陣の時もす

一と後

白鹿院殿八はくをり

伯少らて小十人

此の津を云ふこと

元和甲子十月十日下総中川へ

白鹿院殿津野の付出よりして

炮たうとて島しまとちうちうばりばりれれまま市川いちがわに
川がわ 釣つり命いのち小こりて多おほ川がわより時ときは
大小おほい堂だうよりより凍こ死じ寸すん年ねん廿に九く法はふ名な
一い雲うん趙しやう堂だう

正徳まさなり

又三郎 生玉回分

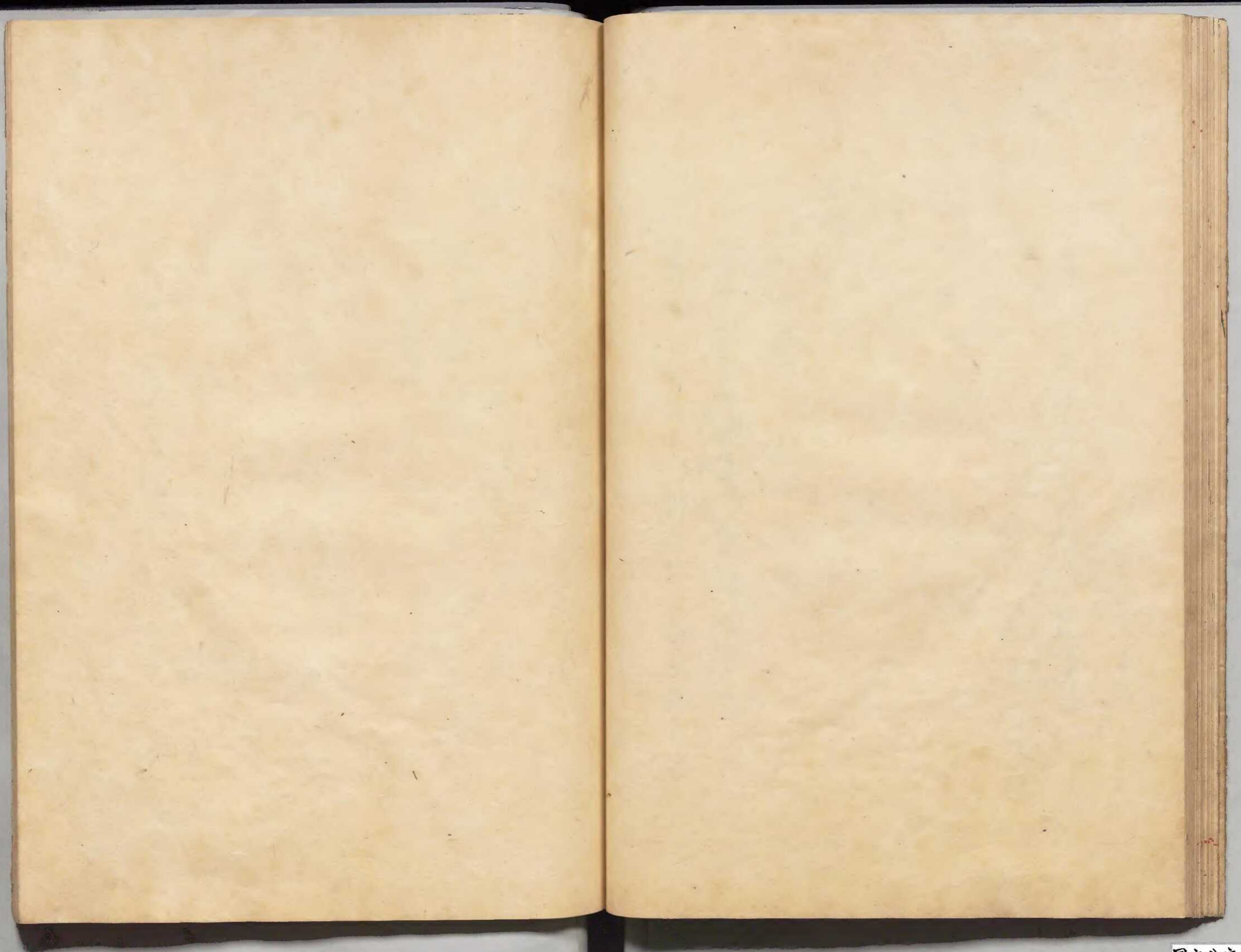
お単たん家け八はち人にんより釣つり命いのちよりよりりて小こ十
人にん組ぐみととなる

寛永十四年八月十日病死時二十
七歳 法名圓室正珠

徳吉とくきち

又三郎

家け級きう十二じふに年ねん骨こつ解げに日ひの丸まる或ある菊きく



清和天皇十代
長清

大升

小笠原元房流

童名 豊松丸 加次小次郎

延保二年三月廿甲子列小笠原元房流

~~~~~

長孫 まさひ

童名ハ 孝光丸 こむね 孝信 このぶ

治承三年五月十七日山城小六殿 よこ

此殿よかなくせり こ

母ハ新中納言那桐卿女 こ

朝光 あさひ

中条右衛門 なかつち 大井七郎と号す おおい

母ハ家の女房 いへ

政光 まさみつ

播磨守 はりまのり 法名月山 げつざん

政朝 まさとも

法名提山 ていざん 政則 まさのり 法名良鑑 りやうかん

政信 まさのぶ

法名清林 せいりん 忠孝 ちゆうたう

忠重 ちゆうじゆう

中務少輔 ちゆうむすくさうぼう

法名玄英 ほうなむげんえい

忠次 ちゆうじ

法名玄杖 ほうなむげんじゆう

忠勝 ちゆうしやう

伊頭守 いづも

信列小諸城守 のぶりゅうこもろのしやうじゆう

忠成 ちゆうじやう

法名道見 ほうなむだうけん

月小諸城守 つきこもろのしやうじゆう

満雪 まんせつ

河内守 かみのし

油土 あぶらつち

貞隆 さだたか

代、信列 依久郡岩村田の城守 しろにしろのしやうじゆう



家傳かでんよりいづくひく信列のぶらより軍役ぐんやくの  
武士ぶし六子むすこ騎がしと申まをすられは奥隆おくたか千騎せんがし

れおをり

武田たけだ信虎のぶとら志ししく奥隆おくたかが地ちををりし

よりいづくひく信列のぶらより軍役ぐんやくの

武士ぶし六子むすこ騎がしと申まをすられは奥隆おくたか千騎せんがし

れおをり

武田たけだ信虎のぶとら志ししく奥隆おくたかが地ちををりし

よりいづくひく信列のぶらより軍役ぐんやくの

武士ぶし六子むすこ騎がしと申まをすられは奥隆おくたか千騎せんがし

れおをり

武田たけだ信虎のぶとら志ししく奥隆おくたかが地ちををりし

よりいづくひく信列のぶらより軍役ぐんやくの

武士ぶし六子むすこ騎がしと申まをすられは奥隆おくたか千騎せんがし

れおをり

武田たけだ信虎のぶとら志ししく奥隆おくたかが地ちををりし

よりいづくひく信列のぶらより軍役ぐんやくの

武士ぶし六子むすこ騎がしと申まをすられは奥隆おくたか千騎せんがし

れおをり

玄信けんしん

信列のぶら平頃のぶらの城のぶら小佐のぶらにて平頃のぶら玄信けんしんと

早のぶら寸のぶら玄信けんしん勇のぶら力のぶら法人のぶらよりいづくひく信列のぶらより軍役ぐんやくの

長劔とくくられ劔のちまき口尺八寸た  
又字れ口ちり他りの付末の力とト人  
よりせく阿ふにまきハ一む戦場よ  
かもしくと他ハふりしとく付の  
人ま信がひりりちりよ  
貞隆と信虎と合戦の時ハつしすま  
信と先づけとま信戦場よおとしく  
とと一顆と他頭の徳わとあつと  
陣の後くれ切しとまの果とさう

うむすまら諸わかのく軍切と勵す  
ま信戦場よ出ると他ハ徳わとト  
てま信先づけとちり退くと他ハさり  
とくひりりれ一代の武勇つけく  
公戦のま討死す武田信玄うれま  
威と感トて石地蔵と大門峠また  
ま信とまらば武田信玄れいく皮た文  
字れ力大剛のものく可なりあらふ

すむしよきくほのふねるはひるしよ  
とる指頼付すく付る

貞親 まこと

貞友 まこと

大学 だいく

貞清 まこと

宮内少輔 くまのまんのすけ

武田勝頼ぶたのの属りやくして長瀬ながのせの付死

法名大山 たうざん

貞重 まこと

助左衛門尉

政信 まこと

法名玄勝 げんしやう

政行 まさゆき

子 こ

政治 せいざ

肥後守 ひごのり

政俊 せいしゆん

万五郎 まんごろう

祐清法師 ゆうせいぼうし

政継 まさつぐ

新太右尉

氏初重

法衣 ほふえ

信列 しんれつ 年 とし 元 もと の城 しろ と 廿 にじふ のう う て 居 ゐ る 人 ひと

よ 時 とき の 人 ひと くれ 石 いし と 年 とし 取 と り

政成 まさなり

氏初 しんしゆ 右 みぎ 指 さし

石見守

武田信玄 たけだのぶげん 信賴 しんらい 父子 ふし 下 した 属 ぞく 寸 すん

十六 じゅうろく 年 ねん の の 氏 し 信 しん 玄 げん よ よ 三 さん 十 じゅう 二 に 年 ねん 後 のち 列 れつ

えんじう 一の  
満原の城とせしむるに然るまじきなら  
て軍切あり敵より鉄炮とくならく  
政成が股より是より後足人より日  
小浜津の城よかわく戦切あり

天正十年

東照大権現甲列沖出馬に付子政吉 六歳

甥政俊と人質とて幕下と就して

忠節あり

大権現是と沖威ありく大井に越願

職と給ふ

孝長五年上方強動の内

右権現殿宇部宮より本為治とゆく沖

上流あり一は真田安房も昌幸と

かうして是とふくしむる時

大権現政成よく信州境内のゆきとる

小より

右権現殿に沖よりびきと政成よ 信州

らる

政吉

民部少輔

関が原津内陣に後美田の城よりして  
堀とりのめ屏とこりらくうに城と守り  
るめら 釣合よりして城と美田伊豆吉  
信幸よりしてす  
同八年上野友是よりわく五十六歳  
病死 法名玄頂

二十一歳より

信濃院殿より法名より菅田に配れ紐頭と

なり

大坂より知れ陣より信ます

信列 依久 幼小 菅山より病死五十一歳

法名 玄久

政重

五十六歳

政忠 まさただ

与右衛門尉

政宗 まさむね

新右衛門尉

廿六柴田七九郎 康忠女 かすたがしやぶ

十五某より

右衛門殿より入てけり大の御書と

初め後より大御書に記し

寛永元年

右衛門殿に

御命より

右軍家へは入りて御小姓の御書と

はし

政次 まさつぐ

与右衛門尉

廿六に同

政直 まさただ

二十郎

家紋丸の月小松皮巻

とのん

まゝひ



海久 うみひさ

大井 おおい

先祖 せんぞ 大井新嘉政 おおいしんかせい 系圖 けいず 詳 しやう

小笠原 おがさわら 伊藤 いとう

一石 いっしやく 忠勝 ちゆうたか

信列 のぶりつ 小法 せうぼう の城 のしろ

海實うらま

た馬允 一名八巻成はちまき

信列のり小徳の城しんりく

武田信玄小徳の城とせしむるより十三の

はわふ城しんりくりらるるにあり和睦わかくして信玄

小属せうじゆ一申次しんじは居寸信玄と同時どうじよ

判發はんぱつして道賢みちけんとあす

天正二年てんしにねん三月みづのえ天神あまのこよかわる病死やまひ年

六十四

海實うらま

河内かみ

生玉信列

信玄のぶひら小徳のりを列しんりく三方原さんぽうげん合戦あひびきの時

首級くびかきとゆら

信玄のぶひら信列のり小徳のりとありて上列かみ箕

崎さき小かわるこかわる十五ヶ村いそごゑ此地このちとゆらけ

在城あゐりせしむ信玄のぶひらとあす

之後唐田新六郎上野と伝ふる時  
唐田より唐寸唐田改易の後

東照大権現甲列新府人沖出るれ時

松平文清言上して満雪の忠志阿家

事と上関の建よりむらむを

御留しより御多御御の正信これに

うけたまはる

奥列陣をいひし信列上田陣れ記

名徳院殿よりいひしよりいし後 勅令

いりて上列より信の沖書と勅む

寛永四年六月甲子後府よかわく病

死歳八十六 法名一道

高野山友房

来

角之丞

来

日記

一、大井何ゆきとてあは  
高野山

系

表巻

海養

小巻

生玉目

實ハ後田右馬助子ナリ満雪ケ美良子

トナリ

右徳院殿小法師トナリ大坂交夜

法師トナリ

元和九年 始少ナリテ後列ヨリ

大御前トナリ

寛永九年七月

將軍家ヘヨリテ御持ヨリ

同十六日 御命ヨリテ御持ヨリ

當トナリ西上総少ナリトナリ

海養

三巻

油真 あぶらまこと

成子

油平 あぶらひら

源三郎

家紋頭合松皮の裏

このうらまはしらのうらまはし

● 系

仁和保

大井伯耆守

生小信列

出取小仁和保と胸をうらむく仁和保  
と稱号す

系

大和守

生小取列

生小取列

奉晴 たつら

大和守

生玉回分

似世回分

奉誠 たつま

兵庫頭

生玉回分

似世回分

秀吉小治るくくを後

東照大権現八右衛門

台座院殿小治るく

長五郎奥列陣の巻

巻下

よりく羽列衣田小治るく時よ浄

黒下と治るく又

大権現此命より同皇孫城とせあお

と一敵何よりくくく奉誠も又病

とく少く是より威怖と治るく此

詞よりく

何を怖到來披見作回衣白表へ相

御始管野城と責為敵数多討

捕持被祇錫杉骨被滅威皇山

相本多孫八郎にて申也

五月三日御朱印

仁加保を庫及び

大坂沙傳の附奉城 給小うて濱の

城に立番寸と信

お軍家へは久しき御家

寛永二年二月廿四日六十四歳にて

病死

城政

内膳 生玉武彦

元和元年八月八歳に於て

右徳院殿と稱しより翌年より

お軍家へりしはる

旧九年沙小姓繼の御番と信

城次

内記

生玉同家



羽列はり仁に加保か上列か一い家のとま既や寸す

家い級ら一ん文ト字ろ三ろ身が

